

令和6年度 文京区議会建設委員会 視察報告書



▲水俣市役所前にて

視察概要

1 視察日程

令和6年11月6日（水）～8日（金）

2 視察先及び目的

- (1) 熊本県水俣市（熊本県水俣市陣内 1-1-1）
「環境モデル都市の取組、ごみ分別」に関する調査・研究
- (2) 熊本県（熊本市中央区水前寺 6-18-1）
「熊本県県有林オフセット・クレジット（J-Ver）の販売事業」に関する調査・研究
- (3) 熊本県菊陽町（熊本県菊池郡菊陽町久保田 2800）
「TSMCの進出による菊陽町のまちづくり」に関する調査・研究
- (4) We Love 天神協議会（福岡市中央区天神 1-15-5 天神明治通りビル）
「天神地区のまちづくり活動」に関する調査・研究

3 視察参加者

委員長	名 取	顕 一	
副委員長	小 林	れい子	
委 員	ほかり	吉 紀	
委 員	依 田	翼	
委 員	豪 一		
委 員	宮 本	伸 一	
委 員	品 田	ひでこ	
同 行	川 西	宏 幸	（都市計画部建築指導課長）
随 行	佐久間	康 一	（区議会事務局長）
随 行	下 笠	由美子	（区議会事務局議事調査担当主査）

「環境モデル都市の取組、ごみ分別」に関する調査・研究

1 視察先名称

熊本県水俣市役所

2 視察日時

令和6年11月6日（水）14時30分～16時30分

3 視察目的

「環境モデル都市の取組、ごみ分別」に関する調査・研究

4 視察先対応者

水俣市福祉環境部環境課環境もやい推進係

主事：中村 薫平 氏

5 水俣市の概要

(1) 人口

21,669人（令和6年11月1日現在）

(2) 位置

水俣市は、熊本県の南端、鹿児島県の県境に位置し、北から北東にかけて葦北郡津奈木町、芦北町、球磨郡球磨村、南から南東にかけては鹿児島県出水市、伊佐市に接しており、西は八代海（不知火海）に面している。

(3) 面積

163.29 km²

(4) 紹介

水俣市は不知火海を望むリアス式海岸の美しい湯の児海岸や、深緑に囲まれた湯出七滝、歴史情緒溢れる温泉街、環境をテーマとした最新施設など見どころが多い。また、日本の地中海とも呼ばれる温暖な日差しからのデコポンをはじめとした山海の恵みや、水俣独自のスイーツやご当地ちゃんぽんなどグルメも多くある。



◀水俣市の特産品（配布資料より引用）

6 視察内容

水俣市では公害問題を克服し環境モデル都市づくりを宣言して町づくりに取り組んでいる。様々な家庭ごみに関する分別の仕方と出し方を詳細に決めており、市が収集する家庭ごみを23品目に分類している。その取組について説明を受けた。

(1) 水俣病の発生

水俣市は、1908年(明治41年)に日本窒素肥料株式会社水俣工場が設立されて以来、工業都市として発展し、1956年には人口が5万人を超えた。

チッソは戦前には薬の原料となる肥料の生産で発展した。終戦後、チッソは化学繊維や塩化ビニールを作るために必要なアセトアルデヒドを独占的に生産し急激に発展した。国民の生活を豊かにする上で欠かせない薬品であった。そのアセトアルデヒドの製造過程で水銀が使用されていた。水俣工場でのアセトアルデヒド生産が伸びるほど海に放出される水銀の量は増え、やがて水俣病(メチル水銀中毒症)が発生した。

(2) 環境モデル都市づくりへ

その後、水俣病のような公害を二度とおこさない、「環境」を大切にしまちづくりとして「環境モデル都市づくり宣言」として1992年から取り組み、その一環としてごみ分別の細分化を行っている。

燃やすごみ以外に、資源ごみを22種類に分別し、リユースやリサイクルの他に原料として利用できるものは販売し、利益を上げている。(令和5年度で1,465万円)そこから必要経費を差し引いて、約1,000万円を市内の26地区へリサイクル還元金として分配している。還元金のごみの回収ステーションの維持費の他に、地域の街路灯建設など各々の地域が自由に活用しているようだ。

また、資源ごみを回収ステーションに持ち込むのが困難な高齢者に対しては、地域の中学生が高齢者宅に出向いてごみ出しを代行する「ゴミニュケーション」を行い、地域とのコミュニケーションを図っている。



▲水俣市役所にて説明を受ける様子

7 質疑応答

Q： ごみの分類が細かく、月1回しか収集が無いものも多い「高度分別」の実施に地域住民の方々はどのように慣れていったのか。引っ越しごみを個人で出さないルールは定着しているのか。今後はどのようにごみの減量を図るのか。

A： 水俣市ではごみの高度分別を始めて30年となる。開始当初は市民からの動揺や意見もあったが、地域での説明会や出前講座等を積極的に開催することでごみ分別の重要性と取り組みに関する理解を得ていった。加えて、環境モデル都市としての環境意識の高まりに伴って、浸透してきたと認識している。引っ越しごみに関しては、転入転出を問わず、特に制限は行っていない。収集日以外にも、ごみ処理センターへの持ち込みであれば受け付けているので、市民はそちらを利用している。ごみの減量に関しては、年々の人口減に伴い緩やかに減少してきている。しかし、核家族世帯の増加や高齢者の割合が高まるにつれてごみの分別も難しくなることが予想される。今後は、ごみの出しやすさと分別による資源化の両立を図ることが必要と考えている。

Q： いち早く環境問題に取り組んでいた都市として、「2050年ゼロカーボン」に向けた取り組みはどのように行われていくのか。

A： 水俣市では令和5年3月に策定した「水俣市環境モデル都市第三期行動計画」により、2030年までに2013年度比温室効果ガスの排出削減率50%、長期目標として2050年には実質排出量ゼロを定めており、その目標を達成するために現在環境省からの補助金の活用方法を模索している。また、家庭でのCO2削減のために市独自の補助金として、「家電の省エネ化で補助金」を令和5年、6年と実施した。今後も継続したい。

Q： 水俣病の患者さんは現在もいらっしゃるのか。過去の公害について、子どもたちにどのように伝えていっているのか。

A： 患者に関しては、新たな発生はないが、現在もいらっしゃる。(認定患者で存命の方が230人) 子どもたちへの継承に関しては、熊本県内の小学校5年生が移動教室で水俣病資料館を訪問して学習するスキームがある。

Q： ごみの処理費用はどのくらいか。

A： 燃やすごみに関しては、1市2町の広域行政事務組合で広域処理を行っている。その分担金が年間約5億円。資源ごみの処理は市の環境クリーンセンターで処理をしており、委託料が年間約1億円となっている。



◀水俣市議会議場にて

「熊本県県有林オフセット・クレジット（J-Ver）の 販売事業」に関する調査・研究

1 視察先名称

熊本県庁

2 視察日時

令和6年11月7日（木）午前10時～12時

3 視察目的

「熊本県県有林オフセット・クレジット（J-Ver）の販売事業」に関する調査・研究

4 視察先対応者

熊本県農林水産部森林局森林整備課

課長：宮脇 慈 氏

審議員：清田 雄一 氏

県有林班主幹：山部 徳博 氏



5 視察内容

文京区が令和3年から購入している熊本県の県有林 J-VER（Jクレジット）の効果と現場（県有林）の状況説明を受けた。

(1) 熊本県県有林 J-VER とは

熊本県五木村にある県有林下梶原団地及び八重団地内において、平成19～23年度に間伐を行い、その後の成長によって吸収するCO₂の量を測定してクレジット化した。

このクレジットを販売することで得られる資金を活用して適切な森林整備が継続して行われることで、森林の持つ水源かん養や土砂の流出防止等の公益的機能の維持増進を図る。

(2) 五木村について

プロジェクト対象地の五木村における林業は、植栽、草刈り、間伐、獣害防止策など、保全管理は重労働であり、従事者の高齢化などのご苦勞を伺った。

クレジットが生まれた地域(下梶原団地)は、1,800ha(東京ドーム381個分)あり、3割が広葉樹である。日本の森林の4割は人工林であり、間引きして陽の当たりを良くして成長を促す等、健全な状態に管理するには相当の経費がかかるとのこと。



▲五木村の位置(配布資料より引用)

(3) 文京区の実績

カーボン・オフセットの目的は、「自らの温室効果ガスの排出量を確認し、主体的に削減努力を行うとともに、削減が困難な部分について、他の場所で実現した排出削減、吸収活動等により、その排出量の全部または一部を埋め合わせること。」

そうしたことから、文京区では令和3年度から毎年400tずつJクレジットを購入しており、その効果を確認した。

本プロジェクトにより、森林141haの間伐を行い、二酸化炭素吸収量は4,724t-CO₂(うち販売可能数量は4,583t-CO₂)である。販売実績4,393t-CO₂のうち、文京区は3割を購入しており、一番の購入先になっているとのこと。

7 質疑応答

Q: 全国や県内の林業の従事者の人数は。

A: 熊本県内は2,200人、全国では4万4千人が林業に従事している。50代、60代と高齢化が進んでいるが、若者や女性も少し担いはじめ、重機等の普及で働きやすくなってきている。

Q: 森林環境譲与税も導入されたが、使い方は。

A: ①木材の利用、内装の木質化 ②森林教育 ③山村交流を検討していきたい。

Q: クレジットの販売はどれくらい可能か。

A: 販売可能数は4,600tで、今までに4,400t売っていて、文京区にその3割を購入していただいている。

Q: 全国の県レベルで、この事業をやっているところは。

A: 北海道、青森県、岩手県。市町村でもこれからも行うと考えられる。

Q: 認証までの時間はどのくらいかかるのか。

A: クレジットのプロジェクトを国に申請して、その後現地調査を経て、早くて

も2年ほどかかる。

Q： 今後のクレジット販売についてはどう取り組むのか。

A： 全国の自治体・民間企業と取引したいが、CO2削減の目的だけでなく、生物多様性の確保や、防災や人の交流などの様々な付加価値を含んだ熊本県らしい取引に展開したいと考えている。

Q： 主伐（木を収穫するため）によって切った木は、建築資材になっているので吸収量にカウントしてもいいのではないか。

A： 2年前に制度改正されて、木材として使った分をカウントして良いことになった。木を切って、使って、植えて、育てるという循環型で行っている。

Q： 地球温暖化の影響や近年は災害が多いので対策を伺う。

A： 林業の課題は、人材の確保であり、県内に林業大学（1年制）を創設した。また、山の土地の所有者の許可を得て管理をさせていただき取組みをしているが、所有者が多くなかなか進まない。植栽によって木に根を張らせているが、それを上回る雨量の災害と表層崩壊や深層崩壊が起きている。

Q： 国産木材と外国産木材の違いは。

A： 国産は、スギなど水分の含有量が高く、コストも高い。外材は、低コストで乾燥させているがシロアリ対策は弱い。かつて国産の木材が成長していなかった頃、国際価格が低い外材が入ってきたことから林業が衰退してしまった。しかし、アメリカ・カナダなどは天然林が多いため、将来的な持続性については、人工林が多い日本の方に強みがあると思う。中でも九州は人工林が多い。また、今後は成長の早い樹木を開発していき競争力を高めたい。



◀熊本県議会前にて

「TSMC の進出による菊陽町のまちづくり」に関する調査・研究

1 視察先名称

熊本県菊陽町役場

2 視察日時

令和6年11月7日（木）14時～15時30分

3 視察目的

「TSMC の進出による菊陽町のまちづくり」に関する調査・研究

4 視察先対応者

菊陽町都市整備部都市計画課まちづくり推進室

室長：久保 克也 氏

主査：荒木 良彦 氏

都市計画係

主事：沼田 康佑 氏

5 熊本県菊陽町の概要

(1) 人口

43,833人（令和6年10月31日現在）

(2) 位置

菊陽町は、熊本市の北東部に位置し、東には阿蘇の連山が眺望できる。

(3) 面積

37.46 km²

(4) 紹介

熊本市に隣接する立地を生かし、ニュータウンの建設などで人口が継続的に伸びてきた。農業も盛んで、ニンジンが特産物。東西に延びるJR豊肥本線の3駅を中心に住居が連なる。南北には整然と区画された圃場（ほじょう）が広がる。以前より農地と都市部の均衡ある発展に努めてきた実績がある。また北東部には県が作った工業団地「セミコンテクノパーク」がある。

菊陽町マスコットキャラクター「キャロッピー」▶
（菊陽町HPより引用）



6 視察内容

世界最大の半導体受託製造企業である TSMC がソニーグループと合弁で設立した JASM の工場が進出した熊本県菊陽町。急速な経済発展を支えるための街づくりについて同町まちづくり推進室より説明を受けた。

(1) TSMC 進出の流れ

元から九州には半導体関連企業が多く立地していた。特に地下水が豊富な熊本県には関連産業が多い。TSMC の進出先である「熊本セミコンテクノパーク」(原水工業団地)にはソニーグループの工場があり、東京エレクトロンの工場も立地していた。そうした環境下で国が経済安全保障などの観点から巨額の補助金を呼び水に TSMC の国内誘致を進めた。

(2) TSMC 進出までの流れ

2017 年	第二原水工業団地の造成を開始
2021 年	ソニーグループから TSMC との合弁で投資を進めたいとの申し出
2022 年	JASM 第一工場の建築工事開始
2023 年	建築工事完了
2024 年	第一工場開所、第二工場の進出を岸田首相が表明

(3) まちづくりの進展

TSMC 進出などによって人口増や物流の増加が見込まれるため、町では国や県と連携しながら交通インフラの整備を進めている。併せて新たな土地区画整理事業により、鉄道駅に比較的近い農地を市街地に変える方針である。

(4) 交通インフラの整備

ア) 道路

菊陽町では元から交通渋滞が課題だった。空港にほど近い立地であることから、空港と市街を結ぶ菊陽空港線の延伸に注力していた。ただ TSMC 進出後は、計画はあっても進んでいなかった他の道路整備が国や県の支援により事業化が相次いでいる。工業団地へ続く東西道路である県道大津植木線の拡幅に加え、国が早期の完成を目指す中九州横断道路へのアクセス道路も整備も進む。これらがおおむね5年以内に完成することで交通渋滞対策が大幅に進む見通しである。

イ) 鉄道

町内には JR 豊肥本線の光の森駅、三里木駅、原水駅という3つの鉄道駅がある恵まれた立地である。ただ人口増を受けて町は令和4年(2022年)に三里木駅と原水駅の間地点にさらに新駅を建設することを JR 九州に要望。令和5年には両者で覚書を締結した。現在、早期の開業を目標に設計に入っている。

ウ) 市街地の整備

JR 新駅と原水駅間の地域は鉄道の南側は市街地化されているが、北側は農地となっている。しかもより北側のエリアとは違って農地としての区画整理も進んでいないことから、この地域(68.9ha)を市街化区域に編入したうえで土地区画整理事業を実施し、都市基盤を整備する方針である。土地区画整理事業の事業認可は令和8年度(2026年度)を予定している。町としては区画がしっかりと整備された農地については今後も保持していく方針。市街地と農地のバランスの取れた発展を目指している。

新たな市街地については町が将来ビジョンを作成。住宅だけでなくホテル、商業、大学キャンパスなどを誘致する計画を立てている。

エ) アーバンスポーツ施設の整備

JR 新駅予定地の北側にある公園を拡張し、スケートボードやバスケットボールの3×3などができるアーバンスポーツ施設を令和8年度(2026年度)に開業すべく準備を進めている。拡張部分の広さは6ha。世界大会開催の基準を満たす施設とする予定。居住や通勤だけでなく、スポーツを通じた交流人口の増大を目指している。

菊陽町はこれまでも安定的に人口が増えてきたが、TSMCの進出を契機に街づくりを一気に進めようという機運がある。多方面に渡る都市計画や土木事業の調整を小規模な自治体でありながらしっかりと進めているのは特筆すべき点といえる。

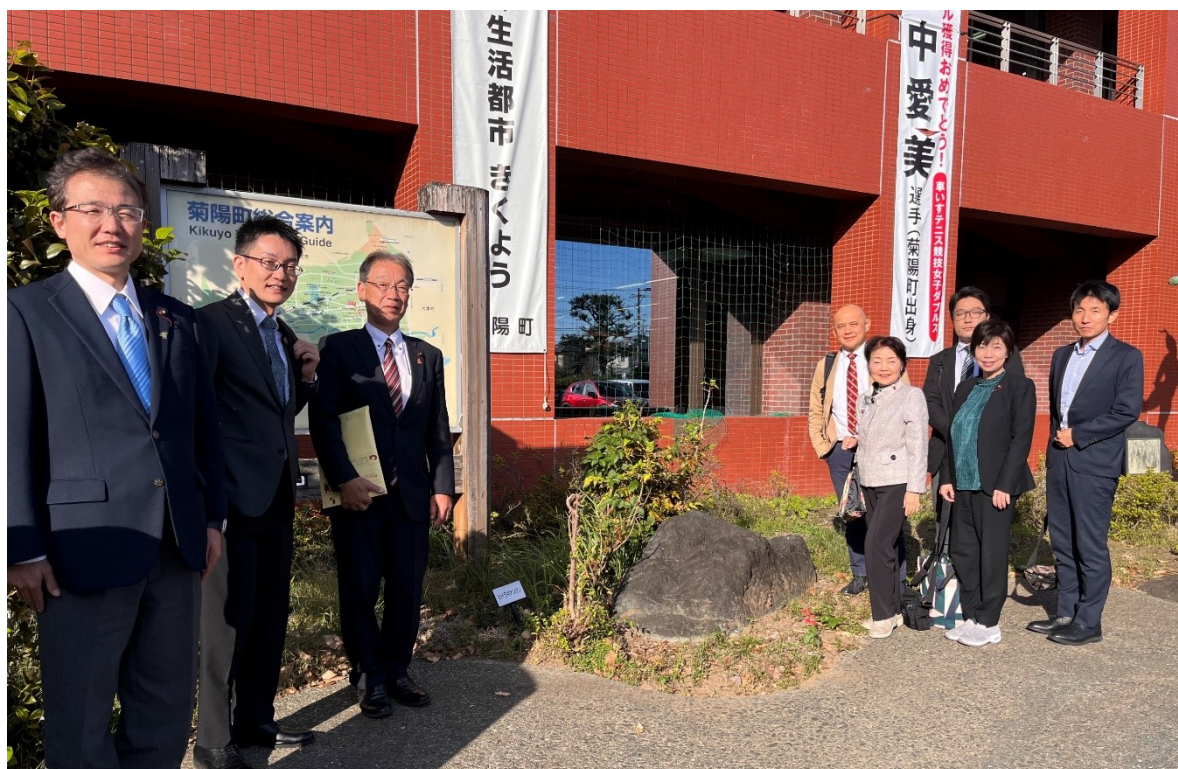


▲開発予定地をバスで回りながら
現地視察した

7 質疑応答

- Q： TSMC の誘致に至るにはソニー工場の進出が大きいと思う。そのきっかけは何だったのか。
- A： 県がセミコンテクノパークを整備していた。空港に近いエリアでもあるので企業を誘致してきた。
- Q： TSMC の誘致は国策だが、町として手を挙げて誘致に至ったのか。
- A： JASM 第一工場の場所は、ソニーの進出を想定し、整備を進めてきた場所だ。ソニー工場の拡張ということで話を進めていたが、ソニーの方から TSMC と組んでやりたいという申し出があったので、県と一緒に進めていった。
- Q： 町の急速な発展に町民はついていけないのか。
- A： JASM が来る前から渋滞問題はあった。懸念の声もあるが、来てほしいという好意的な声もある。地価の高騰による一部の事業者の撤退はあるが、税収の増もある。
- Q： JR 新駅周辺で土地区画整理事業をすることだが、都市計画区域の線引きはどう決めるのか。資産価格が大きく変わってくるはずだが。
- A： 基盤整備されていない農地について転用するという考え方で動いている。綺麗に基盤整備されている農地は農地としてしっかり残す。
- Q： 資料にはシェアサイクルや BRT についても触れているが、現状は。
- A： シェアサイクルは実証実験中。BRT はまだ構想の段階。現状は原水駅からセミコンエリアへの通勤バスを朝晩通しているが、今後新駅もできるので人の動きが変わってくるのであれば、そのタイミングで BRT という構想も煮詰めていきたい。
- ※「BRT」とは、走行空間、車両、運行管理等に様々な工夫を施すことにより、速達性、定時性、輸送力について、従来のバスよりも高度な性能を発揮し、他の交通機関との接続性を高めるなど利用者に高い利便性を提供する次世代のバスシステムです。(国土交通省ホームページより引用)
- Q： 今後の人口予測は。
- A： 現状 4 万 4,000 人くらい。5 万人で市になるが、町の思いとしてはどんどん発展させて人口を増やして市になるというような考えは持っていない。商業、農業、住居のバランスを維持しながら、若干増えるくらいで 5 万人前後くらいまでの人口推移を見込んでいる。

- Q：アーバンスポーツ施設はどのような利用者を見込んでいるのか。
- A：町としては定住人口と交流人口の2つを意識している。町の発展は熊本市のベッドタウン的な位置づけだった。集客力のある施設はなかった。それに代わるものとしてアーバンスポーツをもっていきたい。熊本市側からも、空港側からも来られる位置にスポーツ施設を置く。町の収支をプラスにして基金を積み上げればいいという考えもあったが、今の世代からいただいている税収をただため込むだけで今の世代に返さないというのも問題がある。現世代にある程度還元するという考えでやっている。
- Q：駅の南側が住居地域だった。今度は北側で区画整理。元からそういう用途地域の区分けだったのか。どう変わってきたのか。
- A：駅の北側は市街化調整区域。令和7年度中に市街化区域への編入をした上で区画整理の事業認可を県知事からいただく。まちづくりのマスタープランは町でつくるが、市街化区域への編入については県全体の人口フレームのような考えもあるので、検討調整が必要だった。
- Q：ソニーが入った時点でこの街づくりを考えたのか、それ以前からのものだったのか。
- A：区画整理については以前からあった。当初は定住人口を増やす取り組みを考えていた。TSMC が来て人の流れが大きく変わるので、大学を呼ぼうという話になった。スポーツパークは町長の公約で TSMC とは関係ないが、国から予算をもらいやすくなった。



▲菊陽町役場前にて

「天神地区のまちづくり活動」に関する調査・研究

1 視察先名称

We Love 天神協議会

2 視察日時

令和6年11月8日（金）9時30分～11時30分

3 視察目的

「天神地区のまちづくり活動」に関する調査・研究

4 視察先対応者

事務局長 : 荒牧 正道 様

事務局次長 : 戸川 祐志 様



▲We Love 天神協議会事務局にて説明を受ける様子

5 福岡県福岡市天神地区の概要

(1) 位置

天神地区は福岡市中央区にある九州最大の繁華街。福岡空港から電車で約10分、博多駅からは約5分という立地の良さが魅力である。

(2) 特徴

- ア) 職住近接のコンパクトシティ
- イ) 世界一の商業集積地（2018年当時）
- ウ) 充実した地下ネットワーク

(3) 天神の様子・印象

天神はここ数年で、まちのビジュアルがとてもあか抜けていく様子が伺える。特に運河沿いの様子は全く違うものだ。現在は歩行空間が広く、イルミネーションでかわいらしく飾り付けられている。イベント広場もあり広い空間の利用ができるよう変化した。オープンカフェ、レストラン等が並び、すっかりおしゃれな街になった。以前は東京でいうと昭和の新宿・新橋といったところであろうか。



▲天神エリアの運河周辺の風景

6 事業内容

(1) 天神ビッグバンについて

規制緩和によって民間投資を呼び込む『天神ビッグバン』プロジェクトは、警固断層のリスクがある中、更新期を迎えたビルが耐震性の高い先進的なビルに建て替わることにより、多くの市民や、働く人・訪れる人の安全・安心につながるもので、さらに都心部の機能を高め、新たな空間や雇用、税収を生み出すプロジェクトである。



▲天神ビッグバン第1号
天神ビジネスセンター



▲現在建設中のヒューリックスクエア
福岡天神（2024年12月竣工予定）

(2) 規制緩和について

昨今老朽化し、更新期を迎えた建物の新陳代謝を促すために、規制緩和等が行われている中、建築紛争を防ぐため、文京区では平成26年に建築の規制を強化した。今回の視察で、規制緩和によるメリットやデメリットについて研究することができた。

天神では、規制緩和するために数々のハードルをクリアしなくてはならなかった。博多駅周辺開発との協調、福岡空港周辺地域ということもあり、航空機飛行の障害にならないよう、建物の高さ制限等の規制があるため、福岡市は2012年に「スタートアップ都市ふくおか宣言」を行い、2013年に「創業・雇用」をテーマとした国家戦略特区を提案し、2014年に「福岡市グローバル・雇用創出特区」に指定された。

福岡市では、国家戦略特区という推進エンジンを活かし、特区で認められる規制改革に、福岡市独自の施策を併せ、パッケージとして一体的に進めることで、雇用の創出や福岡市経済の活性化を図っている。

(3) 天神ビッグバンボーナスについて

更新期を迎えた建物総合設計制度を活用し、複数の建物と共同して再開発する。敷地上空地、公開空地を民間活用できるように「天神ビッグバンボーナス」という魅力あるデザイン性に優れたビルを認定し、インセンティブを付与する制度もある。

●インセンティブ

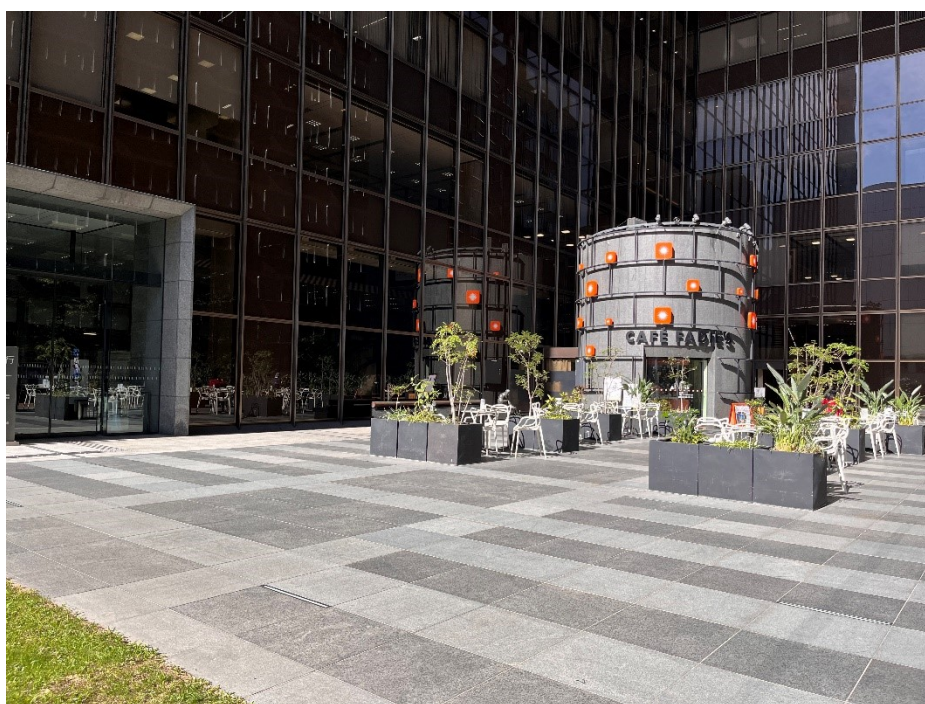
- ・容積率緩和制度（都心部機能更新誘導方策）の拡大
- ・行政による認定ビルのPR
- ・認定ビルへのテナント優先紹介
- ・天神ビッグバン特別融資制度
- ・都心周辺部駐車場の優先利用

●認定要件：魅力あるデザイン性に優れたビル

- ・低層部、公開空地も含めたデザイン性の高いビル
- ・周辺ビルとの連続性を意識した建物デザイン
- ・まちに潤いを与える木陰や花、目に映える緑化の推進
- ・ユニバーサルデザインへの配慮

このような取り組みが、まちに更なる「現代的な賑わい」と「博多祇園山笠」に見られる新旧の賑わいのコラボが感じられる。このような再開発によるインフラの整備も並行され、交通手段と建物に続く地下道の整備もされている。駐車場や駐輪場の整備も並行して行われ、観光客等訪れる人々の回遊性も考慮された。

文京区でも将来を見据えたまちづくりとして、駅周辺の地域等商業地エリアに積極的に活用することにより、まちの安心安全や利便性、公共性をブラッシュアップできると思った。今後の都市計画に反映していきたい。



▲福岡銀行のビルに設けられている公開空地

6 質疑応答

Q： 天神のまちづくりの課題は。

A： 食を求めて天神に来る方が多いが、今後は天神に長く滞在してもらえるよう、観光地の掘り起こしをしていきたい。天神と博多で異なる仕組みを導入することがかえって観光客や市民にとって不都合なものとなるため、博多と連携してより回遊性を高められるよう、まち歩きアプリ等も検討している。昔から天神には最先端のトレンドが求められていると思うので、常に何かしらにチャレンジしていきたい。

Q： 運河沿いのカフェ等、川が活かされているまちづくりと感じたが、前から取り組んでいるのか。

A： 近年になって福岡市が「リバーフロント NEXT」事業を始めた。パーク PFI により民間が参入して、木しかなかった公園がおしゃれになってきている。市の公園と県の公園があるが、一体的に整備されることで統一感のある空間になっている。

Q： IT 活用についてはどのように取り組んでいるのか。

A： 各施設がデジタルサイネージや大型ビジョンを付けている。今後災害時の避難案内に活用できないか、外郭団体と研究している。また、IT 活用により、ハロウィンで時間ごとの人の流れ等を把握することができた。

Q： 猛暑対策はしているのか。

A： なかなか対策は進んでいないが、地下街があるので、そちらに人が流れる。

Q： 私鉄の力が強いと感じるが、いかがか。

A： みんなで協力してやっていくのが理想だが、実際にはけん引する企業があり、私鉄からはかなり強いサポートを得ている。

Q： 公開空地の活用についてはどのように取り組んでいるか。

A： 総合設計を活用した公開空地は数多くあるが、活用できるところはあまりないのが現状。



視察を終えての感想

視察を終えて

名取 顕一 委員長



今回の視察は、熊本県内の様々な取組に対しての調査・研究を見させて頂いた。

まず、水俣市では、水俣病という日本初の公害病という負の遺産を、糧にして、環境モデル都市づくりを宣言。市民一体となって取り組んでいることに感銘を受けた。特に燃やすごみは、1種類だが、資源ごみは22種類もの分別をおこない、令和4年からリサイクル率を40%あげ、各企業との連携も含め、環境と経済の調和を目指している。こうした取り組みを、文京区でも

来年度からプラごみの分別回収が始まる際の参考に使いたいと感じた。

熊本県の県有林オフセット・クレジットの販売事業については、文京区でも購入しているので、その取組について伺った。森林もしっかりと管理しなければならないことや、その従事する方の苦勞がわかり、勉強になった。

次にTSMCの進出によって変わっていく菊陽町のまちづくりについては、工業団地の誘致の成功により、町全体が変わっていく有様を見ることが出来た。特に駅前中心を再開発する計画は、この企業の進出がなければ、計画が大きく変わったことが推測され、企業との関係性が町の発展に寄与している好例として認識できた。

最後に福岡市天神地区のエリアマネジメントについては、天神エリアの企業、団体、住民、行政など多様な活動主体が集まり「We Love 天神協議会」を設立し、一体的なまちづくりに取り組んでおり、点ではなく面の再開発を目指している。区内の再開発の参考に来たらと感じた。

環境政策とまちづくりについて

小林 れい子 副委員長



産業振興や開発事業において環境への配慮は欠かせないが、今回は特に環境政策に力を入れる4つのまちづくりの事例を視察した。

水俣病という負の遺産を抱える熊本県水俣市では、1992年から「環境モデル都市づくり」が始まった。その一環で、23種類にも及ぶゴミの「高度分別」を行い、リサイクル推進委員の指導のもと中学生も参加する協働の取り組みが行われているこ

とは注目に値する。

文京区が購入している熊本県の「森林オフセットクレジット」は、県有林の整備や管理の原資となるが、林業に携わる人々の高齢化、輸入木材による国産木材の価格低迷などの課題を抱えるなか、森林を守ることが地域振興の要となっていることを確認した。

熊本県菊陽町では、台湾の半導体メーカーTSMCの進出による人口増に対応するため道路や駅などのインフラ整備が行われているが、従来からの農業や増加する外国人との共存のための次なる施策にも注目したい。

現在10棟のビルの再開発が進んでいる福岡県・天神地区のまちづくりでは、放置自転車対策や公開空地の活用で、ゆったりとすごせる憩いの空間づくりを目指しており、にぎわいの創出には、安心安全で快適な環境づくりが欠かせないことを理解した。

文京区でも、実効性のある環境政策を積極的に取り入れ、持続可能な世界を目指したい。

建設委員会視察感想文

ほかり 吉紀



令和6年度、建設委員会視察として水俣市、熊本県庁、福岡市天神の視察を行った。

中でも福岡市天神エリアのまちづくりに関してが、興味深いものだった。

行政主導ではなく、地域のまちづくり協議会(WE LOVE天神)が主体となり、「地区として」計画的にビルの建て替えを行うことでエリア全体の価値を高め、共栄することを目的としていた。

福岡市の2大繁華街である博多駅エリアと天神エリアを、中間に位置する中洲エリアを介して徒歩で結び、一体化するなど、斬新なアイデアが多く、文京区のまちづくりにも取り入れるべき点が多く感じられた。(長年お互いをライバル視していた博多と天神のまちづくり協議会が、現在は協働している)

また、地域主導の計画ではあるが、行政(福岡市)も、高島市長が先頭に立ち、高さ制限の段階的な撤廃など積極的に取り組んでいることも興味深かった。協議会の荒巻氏曰く、「高島市長でなければ、高さ制限のスピーディな緩和はできなかつたろう」とのことだった。

文京区に於いても、高さ制限の緩和や特例、立体都市公園制度の活用に向けた積極的な条例改正を検討する必要があると強く感じた。

九州は活気がある

依田 翼



今回の建設委員会の視察では、2泊3日という長い日程を組んでいただき、充実した視察をすることができた。熊本県水俣市の環境問題やごみ分別への取り組み、同県のオフセットクレジットの取り組み、同県菊陽町のまちづくり、福岡市中心部のエリアマネジメントはどれも印象的で勉強になった。九州の資源の豊富さ、アジアへ近いことによる投資の進展など九州の豊かさや活気を肌で感じる事ができた。

福岡市が大都会であることは論を待たないが、熊本市や隣接する菊陽町の発展は特筆すべきものがある。水の豊富さなどから長年にわたって半導体製造基地として栄えた九州が、TSMC という世界最大の半導体製造企業の進出によって沸いている。全国的にも有名になった菊陽町だが、町は浮かれず淡々と、しかしながらスピード感をもって様々なインフラ整備を進めているのが印象的だった。都市計画やまちづくりをどうすすめるかという意識の高さは文京区に欠けているところだと常々感じているので、こうした他自治体の事例を参考に政策に生かしていきたい。

建設委員会視察報告

豪一



熊本県水俣市「環境モデル都市の取組、ゴミ分別」

昭和の環境汚染問題水俣病のイメージが強い我々世代は現在の水俣市に何うことで海の美しさや環境への配慮の取組に学ぶ。まさに失敗から成功へ行政で実直に取り組む事業について学ぶことができた。

熊本県「熊本県有林オフセット・クレジット（J-Ver）の販売事業」

県有林の経営方針と県有林の経営計画（5年）、そしてJ-クレジットプロジェクト計画を関係自治体等との連携や拡大強化することにより地球にやさしいカーボンオフセットを成立する。間伐や山林管理、人材育成の大切さを学んだ。

熊本県菊陽町「TSMC の進出による菊陽町のまちづくり」

新駅をはじめインフラ整備、テーマある運動公園等、まちづくりに大きな開発予算を使うのは良いが、費用対効果に期待したい。企業の発展による法人税収と開発に投入した予算が将来永劫に発展してほしい。

視察を終えて

宮本 伸一



水俣市の環境政策について視察。過去の公害被害の経験をプラスの資産として転換を目指す精力的な取り組みに敬意を抱いた。ごみ分別では、燃やすごみ1種類、資源ごみ22種類として、地域住民の意欲的な協力により成果がでている。地区リサイクル推進委員を各自治会で選任されている事が成功のカギとなっている。文京区でのごみ分別の取り組みにも参考になるものであった。

熊本県のカーボンオフセットクレジットについて視察。文京区が購入するクレジットについて、現地の実態を担当者より聴取。県有林を計画的に整備し二酸化炭素吸収量を改善していることを確認した。脱炭素の取り組みは世界的な課題として取り組んでいる中、広大な県有林を生かしての取り組みは今後も重要であり、文京区としても活用していくことが必要と考える。

福岡市天神地区でのエリアマネジメント活動を視察。商業集積地としての天神地区を地域のステークホルダーが団結して取り組んできた経緯を学んだ。2005年の福岡西方沖地震を機に、災害対策の視点から急速にまちづくりへの機運が高まり、「天神ビッグバン」と称した再開発に成功している。リーダーシップを発揮する事業者が成功のカギになると思った。文京区でのまちづくりに生かしていきたい。

熊本・福岡の環境政策やまちづくりを学ぶ

品田 ひでこ



水俣病で知られる水俣市に初めて訪れました。勝手なイメージとは違い、今では風評被害払拭のため環境浄化に積極的に努め、22種類の資源ごみ分別を地域住民と一緒に進めていて、環境政策の成果を出す取組みを学びました。

令和3年から文京区が購入している「熊本県県有林オフセット・クレジット（J-Ver）」の成果を確認するため、熊本県庁で説明を受けました。森林整備や管理運営等計り知れない林業のご苦労と取組みが環境政策に寄与している制度を確認できました。今後は、文京区の購入単価を下げる交渉と木材利用のさらなる推進の提案をします。

次に、半導体国内産業は国策であり、ソニーをはじめとした企業と熊本県と連携する「TSMC 進出による菊陽町」の取組みを視察しました。半導体供給不足が解消されるよ

う、半導体の日本国内生産の成長に期待します。

「天神地区のまちづくり」は、住民や地元企業と一緒に再開発をエリアごとに進め、福岡都心部を“コンパクトシティ”に創り上げていく大規模なプロジェクトです。国家戦略特区も活用して、天神の魅力アップや機能の更新にまちの成長が期待されます。

今回の視察は時間的余裕があり、4カ所の貴重な政策を学び実り多い視察でした。